

二〇三三年八月四日

諍いを悔いつ片陰戻りけり
幼名で呼び合ふ座敷初盆会
減らず口達者となりて夏休み

二〇三三年八月三日

ぼんぼこのお腹にフリル子の水着
クーラーを効かせ看護の今後聴く
群青に空洗ふごと月涼し
苔涼し碑に寄進者の我が名あり
待ち人もいまは鬼籍や打水す

二〇三三年八月二日

炎天下人影の無き漁師町
瘦せゆくは詮なき事よ心太

二〇三三年八月一日

名を呼べば向日葵畑に猫応ふ
芋の葉が行くてを塞ぐ観音径
遠花火土手に影絵の人の列
好まねどエアコン頼む猛暑かな
突風と戦ふ家路雷雨急
今日もまた遠雷のみで雨降らず
大摩崖仏へと容赦なき西日

二〇三三年七月三十一日

熱帯夜コンピナートは煌々と
傘の陰手向く目高の手水鉢

たか子
うつき
もとこ

智恵子

たか子

むべ

せいじ

うつき

みきお

たか子

素秀

ぼんこ

素秀

こすもす

むべ

明日香

せいじ

素秀

たか子

塩飴を舐めて猛暑に耐へにけり

海原の間遠に響く遠花火

夫婦してお昼寝タイム日課とす

ひ孫らの経たどたどし初盆会

対岸の島浮かびたる遠花火

二〇三三年七月三〇日

秋蝉やまた訃報聞く同窓会

夏休み孫と息子の焼くプリン

富士見えて歓声あがるバス涼し

落ち蝉の残る命の足動く

二〇三三年七月二十九日

青田波よりぬつと出し鷺の首

鰻より穴子が好きと瀬戸育ち

芭蕉葉を庇としたる旧家かな

孫娘に着せやる浴衣三代目

不動明の憤怒の顔へ蝉時雨

外つ国の日本人会みな浴衣

古い母の昔語りや庭花火

猛暑日の蛇口から湯の飛び出して

たかを

なつき

きよえ

うつき

なつき

もとこ

あひる

澄子

たか子

素秀

よし子

むべ

はく子

ぼんこ

あひる

せいじ

満天

毎日句会みのる選・二〇三三年八月六日